なくそテ原発大集会に900人

柏崎刈羽原発再稼働許すなの声、高らかに

政府・財界による柏崎刈羽原発再稼働の動きが強まる中で、「なくそテ原発2024柏崎大集会」が29日、約900人の参加で取り組まれました。

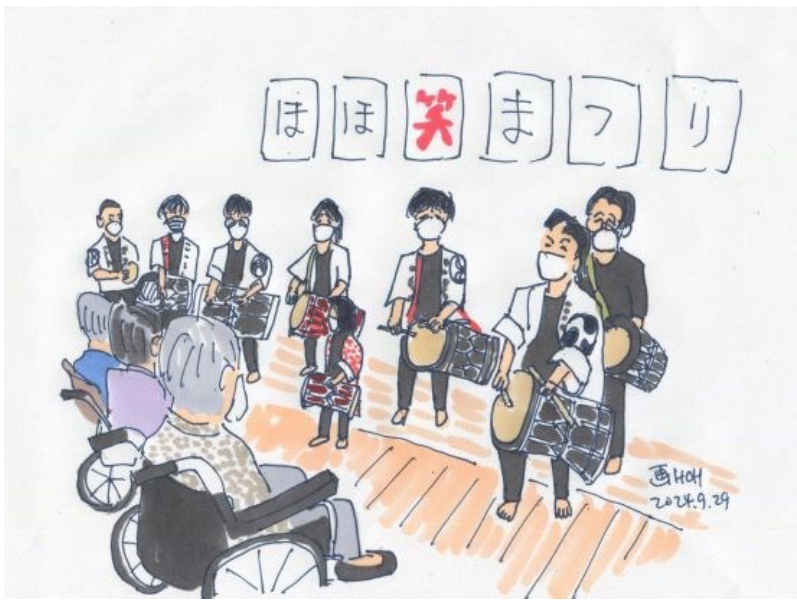
メイン弁士は2006年に日本で初めて原発運転差し止め判決を出した元裁判長の井戸謙一さん。日本の原発差し止め訴訟の歴史を振り返りながら、原発再稼働の動きにストップをかけるにはどうしたらいいかを語りました。

そのなかで、「現場の裁判官は多かれ少なかれ矜持を持っている。様々な要素のせめぎ合いの中で結論が出る。明快な理由で判決が書けること、世論の後押しがあることで大きい」「最高裁が差し止めを是認せざるを得ない状況を法廷内外でどう作っていくかが課題だ」とのべました。

井戸さんは、「（何重にも安全対策をする）多重防護の考え方は社会通念」だとして、船舶安全法や航空法を例に説明されました。とてもわかりやすく、説得力がありました。

新潟県内の動きを報告したのは新潟国際情報大学教授の佐々木寛さんです。

冒頭に自民党の総裁選と立憲民主党の代表選に触れ、どちらも原発に触れようとしなかったと辛口の評価をしました。永田町での右か左か真ん中かの議論だけでなく、日本政治の「タテ軸」の議論が重要であるとものべました。米山知事誕生の頃から現在の花角知事誕生に至る知事選の歴史を振り返り、現在の「市民検証委員会」の動き、「柏崎刈羽原発再稼働の是非を県民投票で決める会」の活動の位置をのべ、「世界最大の原発立地地域で、市民が自らの安全や運命を力で考え、実践する（自治の）試みは、国内外のすべての原発立地自治体の住民に、21世紀の民主主義のモデルを示すことになる」と訴えました。佐々木さんの話はいつも歯切れがよく、わかりやすいですね。



集会では「生田バンド」が平和、反原発の歌を披露してくれました。

ほほ笑よしかわの里まつり、賑やかに

先週の日曜日、「ほほ笑よしかわの里」まつりに参加してきました。1階のホールは入居者や家族などでいっぱいでした。

頸北太鼓、瑞芭（みずは）の賑やかな演奏で一気に盛り上がったまつり。神輿が登場したり、健康体操があったりして皆さん嬉しそうでした。私の従姉もここの施設に世話になっていますが、2年前に亡くなった母の元気なころの写真を見せたら、微笑んでくれました。良かったです。

久々に巣に戻ったコウノトリの親鳥夫婦。巣が小さくなっているのにはびっくり。9月29日，吉川区内にて撮影。

【テイカカズラ】キョウチクトウ科のつる性常緑低木。漢字で「定家葛」と書きます。別名は「マサキノカズラ」。定家はいうまでもなく藤原定家のことです。死後も愛する女性を忘れられず、葛になって墓に絡みついたという伝説があります。花期は5月から6月。花は白色から淡黄色になります。花言葉は「優雅」「優美な女性」。9月27日、柿崎区上下浜にて撮影しました。

はしづめ法一の活動レポート

No.2174 2024.10.6

発行・編集 日本共産党上越市議　橋爪のりかず
Tel 025-548-3628
通じないときは 090-5392-1961
E-mail hasiznyg_0808@yahoo.co.jp
URL https://www.hose1.jp/

ブログ「ホーセの見てある記」は←こちら

橋爪法一　検索

春よ来い　第八二回　最後の手紙

一〇月八日は母の命日。先日、三回忌法要を前にして一通の手紙を探しました。昨年の一〇月一〇日に急死してしまった弟が書いた母宛ての手紙です。

手紙は母の部屋にある三段ケースの一番上の引き出しの奥にありました。デイサービスで毎年もらっていた誕生日祝いの写真や母のアルバムと一緒になっていました。記憶は薄れていますが、しまったのはたぶん私だと思います。

手紙は「母に最初で最後の手紙」というタイトルで、原稿用紙に書かれていました。封筒には「令和二年六月一八日」とありましたので、その日からじきに私に渡されたものと思います。本文はたいして長くないので、原文のまま紹介します。

……

「おかあさん、ありがとう」と一五行程連記して青い郵便入れを貰ったのは小学二年の頃。郵便局主催の母の日に読んだ作文と思う。

喜んでくれた父母は家入口の柱に打ち付けてくれた。

その母が九六歳で再入院したので、もう一度、最後になろうお礼と思い出を手紙にと誓った。

あなたは、小さい体で夕方遅くまで田畑の作業をし、疲れ、風呂のフタを重ねた板の上でよくコックリしていましたね。天ぷらやリンゴ入りジャガイモサラダは山ほど作り、腹一杯。茶碗蒸し、押し寿司が手料理の筆頭で何でも上手で旨かったよ。

生活、子・孫の小遣いにと椎茸の行商や山菜を青空市場への持ち込みと商魂たくましかったね。

「悪いことだけはしんなや」「お世話になった人に感謝を忘れるなや」と私に説教してくれましたね。

母が病院へ行く朝、顔を見に行くと、「おお、イサムか」「名前、覚えてていありがとう」と言うと、当たり前でねかと目を細めながら微笑んだ母でした。

近く、教えてもらった沢菜取りして届けるよ。「ほんとうにありがとう」。

……

この年の六月九日、母は市内の病院に入院しました。五月に退院したばかりでしたので、そのまま母は帰ってこれないことがあるかも知れないと弟は思ったのかも知れません。

でも、私はその再入院の際も、「母はまだ大丈夫。また家に戻れる」と思っていました。というのは、入院して四日後の一三日、母とスマホを使ってオンラインで対面したときも、顔の表情はいまひとつだったものの、しゃべりはひと言、ふた言ではありませんでした。けっこう長く話ができ、元気な時と同じくらいだったからです。

実際、母は同じ月の二七日に退院しました。退院後、介護施設に三か月ほど入所したこともありましたが、基本的には家にいて、ショートやデイサービスを利用しての生活が一年半以上続きました。それだけ頑張ってくれたのです。

さて、弟が母宛てに書いた「最後の手紙」ですが、最近になって、母が読んだかどうか心配になりました。というのも、私が毎日書き続けているブログに「母に手紙を渡した」とか「読んだ母は喜んだ」などといったことがまったく書いてなかったからです。新型コロナウイルス感染症のこともあり、病院への出入りは厳しかったころのことです。ひょっとしたら、母に渡さないでそのままになっていたのかも知れない。そう思ったら切なくなりました。

母へのあふれる思いを伝えようと書いた弟の手紙は、本当に最後の手紙となってしまいました。六日の母の納骨を前にいま、弟の手紙は母の骨箱のそばにあります。弟の手紙は今度、私が読んで母に伝えます。

学びが多く、感動的な話がいくつも

28日は上越市防災委員会主催の防災講演会でした。講師は新潟大学災害・復興科学研究所の所長・卜部厚志教授といわき市の「いわき語り部の会」の石川弘子さん。会場のくびき希望館多目的ホールは300人を超える人でうまりました。私は地震、津波などの災害対策の最新情報を知ろうと参加してきました。

卜部教授は当初予定していなかった能登半島での豪雨災害についてまず言及、地震で地盤が緩んだ中での豪雨災害の恐ろしさを明らかにしました。そのうえで、改めて能登半島地震を振り返り、対策を強化することの重要性についてのべました。その中で「津波避難の見直し」については、「徒歩避難を原則」としつつ、自動車避難で救える命もあるとして、徒歩避難と自動車避難を分ける工夫、地域にしか立てられない避難作戦の検討が重要であるとしました。

石川さんはいわき市久ヶ浜町在住です。ご自身が撮影した災害時や災害後の写真、息子さん撮影の動画などをたくさん映し出しながら、震災時の津波の様子、その後の復興に向けた取り組みなどを感動的に語りました。津波に関しては、「一度避難したら、絶対戻らないでほしい」と訴えていました。津波で亡くなった69人のことを忘れないために69本の桜の木を植えた話、原発があることで大きな被害となったので、「原子力発電はいらない」との訴えが心に残りました。全体として、とても説得力のあるお話でした。

ニュースフラッシュ

上越地域各消防署における空間放射線量率測定結果

測定は毎日午前9時。数値はマイクロシーベルト。１時間当たりの測定量です。

消防署によると、通常は１時間当たり0.016～0.16μSv（マイクロシーベルト）だとのことです。

	9月25日（水）	10月2日（水）
上越消防署	０．０５０	０．０５３
上越南消防署	０．０４７	０．０４７
新井消防署	０．０４３	０．０５０
頸北消防署	０．０４７	０．０４７
頸南消防署	０．０６３	０．０６７
東頸消防署	０．０４７	０．０４３
名立分遣所	０．０６０	０．０６０
高士分遣所	０．０４３	０．０４７